

# 平和憲法を 守りぬく 決意をこめて

早春の日差しに包まれた三月十八日、婦人民主クラブは、創立七十二周年記念のつどいを、東京・千代田区・全国教育文化会館で開催しました。記念講演は山田朗さん、明治大学平和教育文化会館で開催しました。教授、「明治150年に歴史から何を学ぶか」をテーマに語りました。文化行事はコール・かるがもの混声合唱。参加者は百四十人でした。



あいさつする櫻井幸子さん

「つどい」は、石賀多鶴さん（品川支部）の司会が始まりました。主催者あいさつに立った櫻井幸子さん（会長）は次のように述べました。

二月十八日、婦人民主クラブは創立七十二周年の誕生日を迎えました。昨年、国連で核兵器禁止条約が採択された時、六十八年前に全世界で取り組まれたストックホルムアッピール署名の活動を



## 明治150年に歴史から何を学ぶ

記念講演 山田朗さん

書のかなでの活動でした。前広場に千人が集まって開催されました。進行は婦人民主クラブを代表して榎田ふきさん（当時婦民書記長）、また創立間もない国際民主婦人連盟に向けて、宮本百合子さん（婦民創立メンバーの一人）が起草した連帯のメッセージが採択されたといひます。婦人連は国際兵器禁止条約に参加するよう各国に働きかけることを提案しました。同連盟の会長から「核兵器禁止条約の採択を祝福し各国へ批准運動を呼びかけ



熱唱するコール・かるがも

ベトナムと沖縄へ思い寄せ  
混声合唱団 コール・かるがも

大西進さん（作曲家・指揮者・合唱指導者）の指揮による「コール・かるがも」の熱唱が参加者を感動させました。「ベトナム交流の旅」のお土産、冒頭の歌詞をベトナム語で歌う「青い空は」（小森香子・詞、大西進・曲）は、一段と大きな拍手に迎えられました。「あか

最後の「わが人生（大西進曲）は、百歳の榎田ふきさんが、新カイトライオン反対の銀座デモの先頭に立ったその日の作詩。大西進さんの語りと共に心にしみました。ピアノ伴奏は山室知子さん。「私も一緒に歌う仲間になりたいなと思いましたが、力強く、やさしさにあふれ、励まされました。な、感想もたくさん寄せられました。

山田さんは、この日の講演の柱として、①九条改憲問題とは根本的には歴史認識問題である、②改憲論の底流をなす『明治一五〇年史観』（明治礼賛論）とは何か、③歴史修正主義と『明治一五〇年史観』を克服するには何が必要なのか、の三点をあげた。

日本国憲法第九條は、近代日本の歩みに対する「反省」によって制定され、継承されてきました。戦争・植民地支配・自由の抑圧に対する否定的評価（全面的反省）、これが九条護憲論の基盤です。一方、「成功事例」再現の期待に支えられているのが九条改憲論です。彼らは、「成功」を支えた世界的条件は「過渡性」のものであり、成功の裏面、成功がいつか失敗に転化するのを見ようとはしません。

今、政界に蔓延している歴史修正主義、都合の悪いことはなかったことにしてしまおう考え方（例えば南京大虐殺）と明治礼賛論があいまって改憲論を後押ししています。明治礼賛論の行き着くところは必ず日露戦争礼賛論になります。そして昭和戦前期の膨張主義・戦争・人権抑圧は失敗事例と捉える（ただし植民地支配は直視しない）、これがいわゆる「司馬史観」と言われるものから「明治一五〇年史観」として再編されているのです。

日露戦争を戦費十八億円の約四〇％は外債で賄われました。なかでもアメリカ資本（ユダヤ資本）による日本支援、その裏には鉄道王ハリマンの「満州」への進出の意図がありました。日露戦争の結果獲得した満鉄の共同経営というハリマンの申し出を日本は拒否、その後の日米対立の種が蒔かれることになりました。

日露戦争が有色人種に希望を与えたといえるのは確かですが、日本が意図したことはありませぬ。むしろ日本は日露戦争により白人の側に立ち、近隣の有色人種への支配を始めます。日本は欧米諸国と条約を結び、アジアでの植民地支配を容認するの引き換えに、日本の朝鮮支配を認めさせます。ロシアとは満州を南北に分割、日本の朝鮮半島支配を認めさせます。第二次大戦で日本が最も多くの兵力を送ったのは、中国大陸だったのです。